

方裏、官  
戦報、見  
編報、せ  
た



監修 手嶋龍一氏

'49年生まれ。外交ジャーナリスト、作家。慶應義塾大学院教授。元NHKワシントン支局長。近著に「ブラック・スワン降臨〜9.11〜3.11インテリジェンス十年戦争〜」など

# 外交に“黒衣”あり かつて日本にも優れた インテリジェンス “情報の専門家”がいた

1967~  
1972年

## 沖縄返還交渉で 佐藤首相の密使をつとめた

国際政治学者  
若泉 敬

佐藤政権は、「核抜き本土並み」での返還を公約として掲げ、ニクソン政権は沖縄基地を自由に使用したいと譲らない。双方の主張は平行線をたどる。「その交渉下、交わったように見せたのが、秘密合意議事録」だったのです。米国側は「核抜き本土並み」で沖縄を返還するが、日本側は有事での核兵器の再持ち込みを容認する。この

極秘交渉で密使をつとめたのが、若泉氏でした（手嶋氏・以下同）。交渉をやり遂げた若泉は、国家機密を墓場まで持っていくつもりだった。「ただ、沖縄の人々に重い荷を秘密裡に負わせていることが堪え難かったでしょう。極秘交渉の経緯を記した著書を公刊し、その責任をとって命を断つことを覚悟していました」



東大法学部卒業後、大学教授に。交渉当時は30代。「他策ナカリシロ信ゼムト欲ス」英語版を上梓後、66歳で毒杯をあおり自殺

1983年  
9月6日

## 大韓航空機撃墜事件で

官房長官 後藤田正晴

が見せた「したたかさ」



中曽根首相の求めで官房長官に就任。高い危機管理能力から「日本のアンドロポフ」の異名も（左）

9月1日、午前3時26分。ソ連空軍の戦闘機が、領空を侵犯した大韓航空のボーイング747を撃墜。乗客乗員269人全員が死亡した事件。交信記録を、世界で唯一所だけ傍受していたのが自衛隊の稚内電波傍受基地だった。ただ、当時は、この記録が官邸に上がる前に米国に流れるシステムとなっていた。

事件から5日後、日本より先にレーガン政権が公開しようとする。「これは日本が独自に入手した情報です。激怒した後藤田氏は、そのわずか30分前にすべてを発表。レーガン政権に独自の情報戦略を発動し、一矢報いたのです」。国連でも生々しい交信が公開され、ソ連は自国の非を認めざるをえなくなった。

1984年  
2月9日

## モスクワの東郷和彦が つかんだアンドロポフ書記長死去情報

外交官

東郷氏がマークしたのは、アカデミー東洋学研究所のとある研究員。クレムリンの奥に精通した人物だった。2月9日早朝、テレビやラジオ放送は通常の番組を変更し、荘厳な音楽を流していた。東郷氏はクレムリンの最高幹部の誰かが亡くなったと直感。「どうなのでしょう」と聞く東郷氏に、研究員は日本語で一言、「天皇陛下（トッポ）です」と答えたという。

モスクワ発の極秘電は直ちに外務省に伝えられた。日本が世界で最初にアンドロポフの死亡を確認したのである。モスクワの大使館から7回連続で葬儀の日取りや、葬儀委員長など特別な電報が発せられた。閉ざされた独裁国家の中枢で起こった異変を知り得た点で、80年代後半から90年前後の日本外交は今よりはるかに機能していたといえます。

欧州局長、条約局長を2  
歴任。鈴木宗男氏と  
人で対口外交に尽力



ソ連大使館を弔問する中曽根首相。アンドロポフはKGB議長を15年務め情報に精通。晩年は病床から政務をとった異例の書記長

# FSX(次期支援戦闘機)をめぐる米議会工作



FSXの日米共同開発は葬り去られる寸前だった。米民主党の上院議員が対日エンジン技術供与に反対するために出した「バード決議」が可決。ブッシュ大統領は拒否権を發動したものの、全議員100人のうち、3分の1を超える34票を獲得しなければFSXは潰れてしまう。そこで民主党の切り崩しに奔走したのが松永大使でした。日系議員スパーク・マツナガを「隠し票」として確保。最後の1票で拒否権の成否が決まる時に限ってFSX賛成に回る密約を取りつけたのです。運命の日、99票めでブッシュ政権が34票を獲得し勝利。だが、100票めに勝利が持ち込まれたとしても、ブッシュ・松永組の勝ちは揺るがなかった。

83年、外務事務次官。日米間で経済摩擦問題が深刻化する最中の85年、駐米大使に。日本批判を緩和すべく米国内を奔走した

# 湾岸戦争前夜、 が挙げた第一級情報

イラン大使 齊藤邦彦

「湾岸開戦に踏み切る米国にとって、大前提はイランの中立。イランが参戦すれば、情勢は一変する」。だが、開戦前夜、イラク空軍の編隊40数機がイラン領内の基地に飛来する。その情報を確認したのは齊藤邦彦駐イラン大使が率いるテヘランチームだった。「米国はイランの情報を持っていない。斉藤チームは、イランは編隊を受け入れたが中立を守る」と報告した。米国は日本のテヘラン情報に深く依拠していたのです。米政府は、日本の在外公館から打電されてきたインテリジェンスに驚き、日本政府に新たな情報をと懇請。「湾岸にサイトウあり」という声がワシントンから上がったという。



スコウクロフト国家安全保障担当大統領補佐官は「齊藤邦彦はわが多国籍軍のかけがえのない触角である」と言いきった

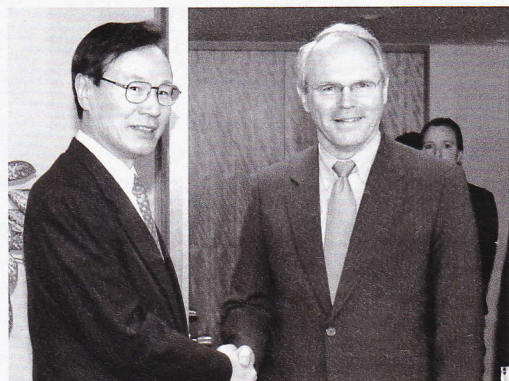


# 小泉訪朝で拉致問題解決を優先 させた

内閣官房副長官補 谷内正太郎

「拉致被害者5人が帰国後、拉致問題の解決を優先する強硬派と、日朝の正常化交渉を急ぐ宥和派が真っ向から衝突した。その論争に終止符を打ったのが、谷内氏だったのです。小泉首相は5人の残留を決意。10月24日、この官邸協議は、対北朝鮮外交の転換点となった。

小泉首相の靖国参拝で冷え切った日中関係を改善したのも谷内氏だった。06年9月、安倍新総理の訪中が実現するかを賭けた極秘会談。谷内事務次官と戴秉国中国外務省筆頭次官。すべては2人の阿吽の呼吸で決着が図られ、5年ぶりの日中首脳会談が実現することとなる。2人の信頼の絆がなければ、この難局を打開することはできなかったでしょう。」



07年2月、米国のヒル国務次官補と握手。小泉、安倍、麻生と、外務事務次官としては異例となる3年の任期をまっとうした

弱体化する日本…先達  
たちに今こそ学べ!

「湾岸戦争において、日本は冷笑を浴びせられた。敗色が濃厚ななか善戦したのが、テヘランの齊藤邦彦チーム。その意味で、日本外交史のなかの一つのハイライトだったので」（手嶋氏）  
外交は「武器を使わない戦争」といわれる。連戦連敗が続く日本のなかに、光輝く男たちはたしかに存在した。密約を結びながらも時代を先に進めた岸、佐藤。黒衣に徹した若泉…。彼らの奮闘が後の繁栄につながっている。「外交に100割の勝利はない。勝ちすぎると痛い目を見る」（春名氏）。勝利に浸っている暇はないのだ。

昨年12月の日韓首脳会談。李明博大統領就任後、日韓関係は「史上最良の時期」といわれてきた。その締めくくりにして、野田首相が提案したのが「日韓FTA」。だが、李大統領は歯牙にもかけず、求めきたのは従軍慰安婦での「政治決断」。日本外交は完敗だった。「中国漁船の船長が韓国の海洋警察官2人を殺害した事件で、李大統領は強く非難していない。北朝鮮問題において、韓国は日本以上に、中国に対して気を使っている。国内世論を日本に向けてるため、従軍慰安婦を持ち出してきたくもいえる」（春名氏）

日本は韓国の意図を読むことができなかった。日中韓3カ国の関係は、今後複雑さを増すだろう。「前線」での人脈、情報収集能力、判断力、そしてそれを総合するトップの決断。そのすべてが勝敗を左右する。すべてを駆使しなければ艦艦艦が跋扈する国際社会で脱落するしかない。

※文中一部敬称略、肩書きはすべて当時